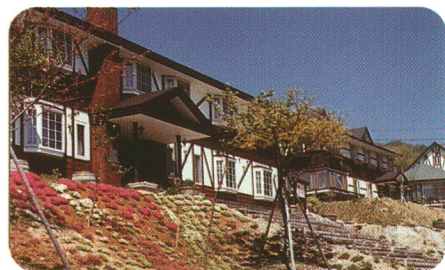


たていわの
ゆとり空間は
交流都市型

会津高原たかつえが創造しい。



高杖原の原風景は木の文化を温める保城峠の木地師の里。木をくりぬいた椀は、ドンングリの実の形をヒントにしたという。特産の会津椀は江戸の市中を制したとされるほどでした。



和風に洋風にと宿泊施設が工夫を凝らす思いはひとつ、個性と魅力に満ちた盤岩らしさの装いです。



ボギーをたたいて思い巡らすのは、通年型の出会いの街づくりです。

高杖の吹雪の里は寒けれど
スキー広場に希望の火もゆ

ゲレンデ一五コース。リフト九本／八三三三m。宿泊施設はホテル風・旅館風・ペンション風・民宿風あわせて一〇〇軒余り。東武鉄道の絶大な協力を得た第三セクター方式による会津高原たかつえスキー場は、一九八一（昭和56）オープン以来、二八九万人のスキーヤーで賑わい続けています。

ふもとの農家六〇余戸の仲間が、この地に県営パイロット事業による東北一の酪農創出

を夢見て二〇年。山林を拓いた牧草地は二五〇ha。四五〇頭の乳牛を飼育し、年間一〇〇〇tの搾乳をもくろみました。

しかし、牧草が思うように育たず挫折感にさいなまれていたのを見かねた村は、館岩名物の豪雪を逆手にとつた本格派のスキーリゾート創出構想を提案。その画期的なビジョンに魅せられて懸命に建設ワークを手伝います。

あれから更に二〇年、滞在型交流の歓声がこだまする『会津高原たかつえ』。夢のようだと瞳を輝かす村人たちは食堂や民宿経営の先駆者ともなりました。そんな古老のひとりには短歌クラブで詠んだ日の心境を懐かしみながら、定住志向の地域づくりの限界と、「交流」が誘発する可能性をいち早く教えてくれた郷土の大地の温もりに感謝する日々です。

21世紀は、遊び心豊かな郷土づくりの時代。そして、業態が変わる時代。心の豊かさを求めて超移動型社会を迎えた今こそ、わたしたちは、ゆとりある生活環境の創出を軸に、生活、文化、産業活動の融合する新たな展開の契機とします。